

(様式2)

令和5年度佐賀大学研究者国際交流支援事業報告書

令和 6年 2月 29日

国際交流推進センター長 殿

事業責任者 (申請者)

所 属 芸術地域デザイン学部

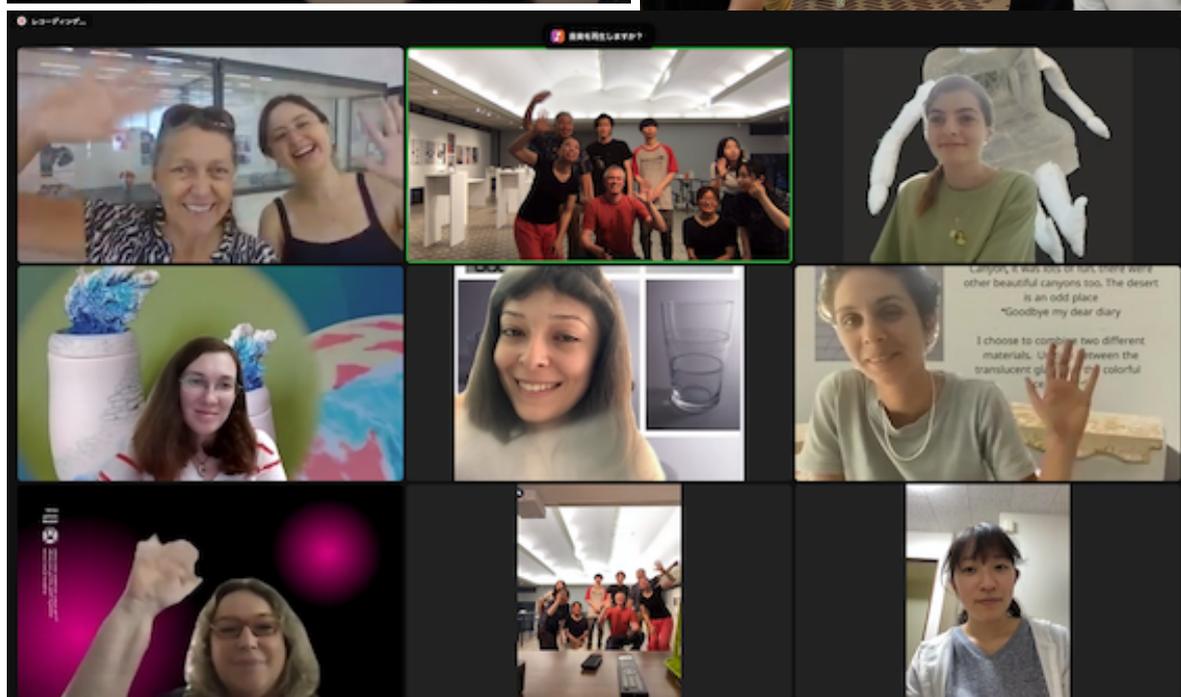
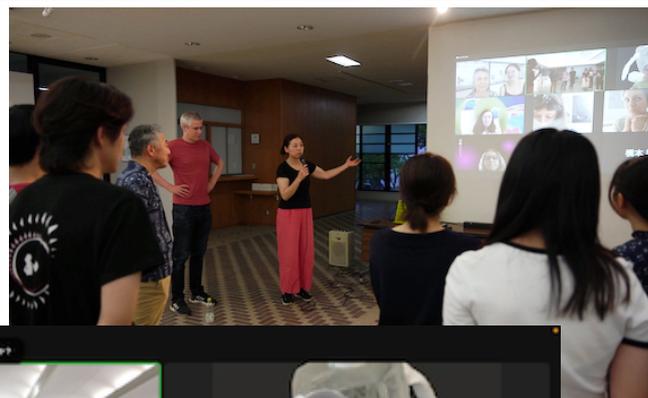
職 名 准教授

氏 名 三木 悦子

下記のとおり令和5年度佐賀大学研究者国際交流支援事業の実施結果について報告します。

1.国際研究集会名	ベツアルエル美術デザインアカデミーとの課題発表セミナー		
2.事業責任者 (申請者)	三木 悦子 田中 右紀	3.所属・職名	芸術地域デザイン学部・准教授 教授
4.開催期間	令和 5年 4月 4日 ~ 令和 5年 6月 28日		
5.申請区分	C) 一般		
6.参加者数 ※参加者名簿(別添) を添付	参加者数 <u>26</u> 名 内、 <u>外国人</u> 数 <u>11</u> 名、 <u>研究者</u> 数 <u>6</u> 名、 <u>学部学生</u> 数 <u>19</u> 名、 <u>修士以上学生</u> 数 <u>0</u> 名		
7.招待講師	所 属 <u>なし</u> 職 名 _____ 氏 名 _____		
8.支出額	金 額 <u>200,000</u> 円 【内訳】 <u>謝金</u> <u>18,160</u> 円 <u>旅費</u> _____ 円 <u>消耗品費</u> _____ 円 <u>印刷費</u> <u>181,840</u> 円		
9.国際研究集会の内容 (実施の様子について、2~3枚程度写真をご提供ください)	(相手国・地域:イスラエル・イエルサレム 相手機関:ベツアルエル美術デザインアカデミー) 令和3年度より行なっている、佐賀大学芸術地域デザイン学部有田セラミック分野とイスラエルのベツアルエル美術デザインアカデミーのガラス・セラミック専攻との教育・研究交流プロジェクトは、COVID-19禍において海外とどのような教育・研究交流ができるかという目的でスタートした。令和3年度の第一弾「おばあちゃんのカップ」プロジェクトに引き続き、令和4年度の第二弾「Story Box」は両校の学		

生がペア/グループとなってオンラインで顔を合わせ、全く異なる生活・文化・思想・地域性・歴史的背景を持つ互いをまずは理解しながら、同じ課題『STORY BOX/箱にまつわるストーリー』をテーマに、「箱」について議論して定義し、その中で得られたキーワードや共通概念をもとに、個々が考える「箱」を、それぞれの大学の特徴ある教育プログラムの中で、専攻する専門性を最大限に活かしながら作品制作を通して交流するというプロジェクトを行なった。作品を相互に送り合い、ペア/グループの学生が制作した作品の現物を手に取って互いの考えを実感し、一つのコンセプトから生まれた作品としての表現やその手法を確認した。それら両校の学生の作品を合同展示し、展覧会の最終日に学生達は実際に手にした作品の実感を共有するオンライン発表会を開催した。



10. 事業実施による成果・今後の事業の発展等

学生達は共に母国語としない言語である英語を用いて交流を行ったが、それ故に相手の思考を理解しようと努力し、また「芸術表現」という創造分野特有の共通言語の中で相互理解を深めた。これまで知る機会のなかったイスラエルという国への理解はもとより、異文化間交流への足掛かりとなり、彼らの自信に確かに繋がっていた。ミーティングを重ねるごとに「箱」への個人的な想いや考えへの理解が深まり、ディスカッションから得られたキーワードをもとに、ベツアルエルと有田の学生がそれぞれ思う「箱」を創り出し、同世代の共通した若い息吹のようなものが感じられた。このプロジェクトによって、同じテーマによるアイデアやコンセプトを共有した両校学生ペア/グループの、作品制作による表現やアイデンティティの違いを表出させ、両校それぞれの持つ教育的特徴を確認することができた。

第一弾のリサーチを主体としたシンプルな研究課題から発展し、第二弾では実際に創造の交流を通じた作品表現とその交換を行うという、より複雑な過程を経た実感を伴う芸術表現の交流は、互いの思考を交換して表現し、認め、理解し合うという芸術を通じた思想のコミュニケーションそのものを学生らに体得させることができた。

これまでオンラインを主体として行ってきた教育研究交流の2つのプロジェクトはその成果を東京ミッドタウンデザインハブでの「ゼミ展 2023」に出展するなど、大きな実績を残すことができ、互いの教育や研究の特徴やその専門性への理解を通して将来の継続的な交流が有効だと確認できた。今後の発展として、実際に互いの大学を訪問し、教育・研究環境の確認と、大学間又は、学部間の連携協定等も視野に入れ、教員・研究者間の対面による交流を計画していきたいと考えていた。そのために約3年にわたる教育・研究交流を将来継続する意味でも、芸術地域デザイン学部有田セラミック分野とベツアルエル美術デザインアカデミーとの2つのプロジェクトを記録集にまとめ、関係機関に配布する予定である。しかし、昨年10月にイスラエル、ガザ地区において戦争が始まったため、計画を中断せざるを得ない。状況を見ながら今後の交流について検討したいと思う。



11. 実施者アンケート

本事業の満足度 (5 (非常に良い) ~1 (非常に悪い)) : 5

支援経費は適切であったか (5 (非常に適切であった) ~1 (非常に適切でなかった)) : 5

次年度以降も本事業の実施を希望するか : 希望する

そのほかコメント : 海外とのプロジェクトは、海外の区切りとする時期がその国々で異なること、また日本のいわゆる年度ごとにプロジェクトで区切られるわけではないため、継続して運営できる支援事業がある方が良い。また、年度初めには事業が行えるような仕組みも必要であると思う。